

人類の半分はどのように暮らしているのか

——女性についての地理学的研究——

ジャクリーン・タイバーズ
(吉田 雄介 訳)

Jacqueline TIVERS

How the other half lives: the geographical study of women

Area, 10-4, 1978, pp. 302-306.

© 1998 The Institute of British Geographers

要旨 地理学者は、他の社会科学者同様、女性の家族役割を強調することで社会の男性志向の視点を永続化してきた。研究の基本単位 (primary unit) として世帯 (household) を用いることによって、そして女性についての明示的な地理学的研究を看過することによって、地理学者は、既存の社会構造、および性別役割の差異に起因する不平等を暗黙のうちに支持してきた。

本論文の執筆は、三つの直接的な要因によって駆り立てられた。まず始めに、最近の *Area* 誌の表紙に描かれた天気図上に、さまざまな地理学的慰み者のひとつとして、「女性の地理学 (geography of women)」が乗せられたことがある。第二は、女性研究 (study of women) を明確に志向した地理学における最初の教科書の出版が差し迫っていることである。そして第三は、空間行動 (spatial behaviour) の説明をこころみるには女性のその役割を理解しなければならないという認識であり、その認識は 1979 年度 IBG 年次大会のための家族役割と都市空間構造 (Family roles and urban spatial structure) に関する研究グループ・セッションの立案にも内在している。

大多数の地理学者は男性 (men) である。これは、地理学的研究の正当な焦点として女性を考慮するというにたいする、地理学者の支配的な、むしろ庇護者ぶってさえいる態度を理解しようとするときに、思い起こすべき最も重要な点である。Hayford は、地理学において女性は「目に見えない (invisible)」状態であると主張している。すなわち、「彼女たちが存在す

るという一般的な認識はあるものの、彼女たちの特別な貢献を検討するためのこころみはほとんどなされない…ひとつの支配的な男性の役割を表出する、ないしは表出するように思われるこうした諸制度は、社会の全体の秩序を表すと解されるが、一方で女性は、なんら明確な役割を持たないか、もしくはこの男性が支配しかつ男性が決定する秩序への絶えざる即応状態にあるとみなされる」³⁾。

この側面において、地理学は概して、社会諸科学の見解を示すに過ぎない。例えば、Oakley は、「社会学は男性志向であるがゆえに性差別的なのだ…性差別的な社会において、男の興味や活動に焦点を当てる、あるいは向かう傾向を示している」⁴⁾ と断ずる。同様に Allen と Barker は、「社会学の大部分は、いかに、かついかなるときに、性別間の関係が…社会構造と行動を説明するのに適切であるのかを問うよりも、むしろ『男性』という言葉の中に (あるいは夫の一部として) 完全に女性を押し込んできた」⁵⁾ と主張する。社会心理学もまた女性の家族役割、特に、母なり子供なりへのその真の関わりと釣り合いを失いながらも女性の生活を大いに支配している「神聖なる」母子関係を最も強調することによって、女性の社会的「不可視性」を強

化する⁹。

社会のなかの女性の位置 (position)、およびお堅い学問的関心対象としての価値の欠如を決定づけているのは、女性の家族役割、そして特に母親としての役割への関心の集中である。すなわち、「女性は今まで本当に個人として…考えられたことはまったくなかった…むしろ、家族という単位の一部と考えられている」⁷。Mitchell は、「女性それ自身と同じように、家族は自然な (natural) 対象として現われるが、しかし、実際のところはひとつの文化的創造物である。女性の特徴ないし役割についても家族の形態や役割についても必然的なものはなにもない」とわたしたちに思い起こさせてくれる⁸。

1974 年にオークレーは、「家族および結婚を扱う文献では、女たちはことごとく、女の (feminine) 役割というカプセルの中に押しこめられている」⁹と主張しているが、しかしまた、変化の兆しは、女性学の特別コースの設置、および社会における女性の位置に関連するより現実に即した文献の出版をともないながら社会学において明白となりつつある¹⁰。不幸にして、同じことは、地理学については当てはまらない。地理学では、「彼女たちが日々の生活の中で果たさなければならぬ、無数の役割と責任に尽力する努力のなかで彼女が直面する諸問題」¹¹ をほとんど無視し続けている。

もちろん、地理学者は、特に消費者行動、社会的つきあい、および近隣認知研究において、長らく女性を考察の焦点として女性を用いてきたと抗議されよう。このように、わたしたちはみな、大勢の消費者、すなわち主婦をよく知っており、「彼女たちの経済的に非生産的な役割は、西欧資本主義の成功に必要な不可欠であり」¹²、そしてまた多くの博士論文の完成にも必須であった。

女性 (そして特に専業主婦) は、きわめて便利なアンケートの素材であると考えられる者もいる。加えて、彼女たちは明らかに、地元指向の活動と認知に関する研究にとってきわめて適切な回答者集団を形成している。しかしながら、わたしは、女性自体がこうした研究における関心対象となっているのか、あるいは女性としての特別な貢献が行動の説明に含まれているのか、ということに疑念をもつ。例えば、女性はどのように、世帯の主な購入者である。買物パターンは、距離、モ

ビリティ、ショッピング・センターの誘引性、供給の階層・レベル、などからさまざまに説明される。とはいえ、買物トリップの有意の部分が純粋に社会的理由のために果たされるとしたらどうなるだろう？ 主婦、特に若い子供を持つ主婦は、購買機能に関するのと同じくらい、社会的相互作用の義務から購買地や頻度を選択するであろうということを示している証拠がある¹³。その意味するところは、わたしたちが、都市社会において女性が演じるその特別な役割を考慮することなくしては消費者行動を完全に理解し得ない、ということであろう。

同様に、家庭の訪問形態に関する大部分の研究は、女性 (通例、専業主婦) によって実行される社会交際に集中する。これは、女性がすぐ近所において密接な社会交際を進展させる傾向が高いためであり、彼女たちの生活は、彼女たちの夫よりもずっとこの環境の内部に包摂されているのだ¹⁴。とはいえ、研究対象が女性それ自体であると強く主張されることはまずない。多くの事例では、関心の焦点を成すのは、社会相互作用のパターンにおける階級差異であり、そして女性は、そうした差異を分析するために彼女の夫の社会・経済的地位に単純に帰されることになる (主婦の存在は、彼女が属する世帯を代表すると仮定される)。孤立し、退屈し、そして孤独な主婦のあいだで展開する平日の家庭の訪問形態にたいするニーズの基盤になっている女性の「ノーマル」な役割についての根本的な前提に立ち向かう研究は、地理学にはまったく存在しない¹⁵。

地理学的調査のなかで、「世帯の代理」として女性を用いている似たようなたくさん事例が存在している。女性を、「ひとつのはっきりした地理的力 (force)」¹⁶ として認識することの欠如につながっているのは、分析の支配的な単位として世帯 (household) への地理学者による注目である。主婦としての女性 (彼女の夫たちの職業に応じて問答無用にレッテルを貼られた) は、実際、まったく「不可視」であり、雇用は「底辺的」形態 (概してパート・タイム、低い地位、あるいは自宅を基盤とする形態) に集中するために、その人数が扱われるべき唯一正当な理由をなすはずの有給労働者としても、学問的な対象にはされない¹⁷。

Gray は、都市の住宅市場についての研究に関連して、「人は自由に一連の選択肢の中から選好したり、選択したり、個人や家族は自分の生活に関わるさまざまな

機会をコントロールするという信仰の支持を仮定したり、提供することによって、都市地理学者は、怠慢にも、既存の社会構造を受容し、支持し、支援し、そして現実の真の理解を妨げてきた」と述べている¹⁸⁾。まさに同じことが社会における性役割の差異との関連においても指摘され得るのだ、というのがわたしの論点である。分析の基本単位として世帯（ほとんどいつでも核家族を意味する）を採用することによって、地理学者は、空間行動を記述する試みのなかで既存の家族役割を暗に受容してきた。性役割の差異によって永続化される社会的不平等の点を考慮した女性の活動の真の説明に向けたところみはまったく存在していない。地理学者は、家族への注目を通じて、既存の社会構造を維持し、女性のその役割、さらにその結果となる行動パターンについての真の理解を妨げてきた。

女性についての地理学的研究はしたがって、女性それ自体から始めなければならない—それは彼女たちが普通は解き難く結びつけられている世帯からではなくだ。わたしたちは、女性を、彼女たち自身の権利で人口下位集団 (a population sub-group) として取り扱わなければならない¹⁹⁾。明らかに、人文地理学のあらゆる分野は、女性についての特別な問題と選好の点からの分析を行うことができる。しかしまた政策指向の点から直接の関心領域は、交通機関とモビリティ（この分野に関連する Hillman の研究²⁰⁾はすでに、世帯を離れ、個人のモビリティの問題に配慮していることでかなりの成功を収めている）、雇用、そして日常の活動パターンに関するより全般的な研究を含んでいる。後者は、時空間 (space-time) における個人の移動に注目する、「時間地理」学派の研究を通じて、まず最初に地理学において顕著なものとなった。特に、Martensson and Lenntorp は、時空間の布置 (space-time configurations) を女性の雇用と育児のニーズに関連して考えている²¹⁾。時間地理学の「制約に基づく (constraint-based)」枠組みは、特に女性についての地理学的研究へのアプローチの一方法として適切なものとなっている。

仮に、Peet が主張するように「未来の地理学がわたしたちの関心を等しく要求する」のであれば、地理学者としてわたしたちは既存の家族役割差異の社会的強調によって生み出される不平等を無視するのではなく、反対にわたしたちはこうした不平等の構造的基盤を検討しなければならない。女性による規定された役割の

一見したところ支配的な受容に、心地よさなどありはしない。すなわち、「わたしたちは、黙従を満足とごっちゃにすることに用心しなければならない。つまり、改善が不可能なことは、不平不満の意識を抑えることなく行動を抑えることができるのである」²⁴⁾。行動とまさに同じように、態度は作用するそのシステムに左右される²⁵⁾。明らかに、性役割の差異を内包する現在のシステムは、不平等の他の諸形態と同じ方式でもって、社会に機能し得る。人文地理学における研究のための支配的な単位として、世帯を受容することによって、そして女性の地理学についての明示的な研究を怠ることによって、地理学者は既存の社会構造を暗に受容し、わたしたちの社会における最も永続的で普遍的な不平等の形態のひとつを検討することを妨げてきたのだ。

謝辞

本論文の執筆にあたっては、社会科学研究評議会 (Social Science Research Council) の研究基金の援助を受けた。

注

- 1) Area 9, 4 (1977), 表紙 (なお、この号の表紙には、英国上空に低気圧が停滞している天気図が描かれており、その周囲には「女性の地理学」や「ゲイ地理学」あるいは「解放運動」といったさまざまな雲が描かれている—訳者)
- 2) Burnett, K. P. (ed.) (1978 forthcoming) *Women in society: a new perspective* (Chicago)
- 3) Hayford, A. M. (1974): 'The geography of women: an historical introduction', *Antipode* 6, 2, 1
- 4) Oakley, A. (1974) *The sociology of housework* (London) 2 (オークレー, A. 著, 佐藤和枝・渡部潤訳『家事の社会学』松籟社, 1980, 2頁)
- 5) Allen, S. and Barker, D. L. (1976): 'Sexual divisions and society', in Barker, D. L. and Allen, S. (eds) *Sexual divisions and society: process and change* (London) 2
- 6) Apps, P. (1975): 'Child care policy in the production-consumption economy', *Public policy paper 2* (Victorian Council of Social Service, Victoria, Australia); Thompson, B. and Finlayson, A. (1963): 'Married women who work in early motherhood', *Br. J. Sociol.* 14, 150-68; Mitchell, J. (1966): 'Women: the longest revolution', *New Left Rev.* 40, 11-37
- 7) Sullerot, E. (1971) *Women, society and change* (London) 89 (シュルロ, E 著, 水田珠枝訳『変革期の女性』平凡社, 1972,

95頁)

- 8) Mitchell, op. cit. 11
- 9) Oakley, op. cit. 17 (オークレー, 20頁)
- 10) 例えば、Tavistock によって刊行された新しい女性研究 (Women's Studies) シリーズ、その第一巻 [Mackie, L. and Pattullo, P. (1977) *Women at work* (London)] は、Equal Pay and Sex Discrimination Acts (1975) (「雇用及び職業における婦人及び男子の同等の地位および機会に関する決議」) の陰にある女性雇用の見通しの現実性について検討する]
- 11) Palm, R. and Pred, A.: 'A time-geographic perspective on problems of inequality for women', *Working Pap.* 236, Inst. Urban Reg. Dev., Univ. of California, Berkeley, 36
- 12) Oakley, A. (1972) *Sex, gender and society* (London) 204
- 13) Brail, R. K. and Chapin, F. S. (1973): 'Activity patterns of residents', *Environ. Behav.* 5, 172-3; Hillman, M. (1970): 'Mobility in new towns', unpubl. Ph.D. thesis, Univ. of Edinburgh, 21; Mann, P. H. (1965) *An approach to urban sociology* (London) 162; Myrdal A. and Klein, V. (1956) *Women's two roles: home and work* (London) 148 (ミュルダール, A., クライン, Y. 著, 大和チドリ・桑原洋子訳『女性の二つの役割: 家庭と仕事』ミネルヴァ書房, 1985)
- 14) Raine, J. W. (1976): 'Social interaction and urban neighbourhood', unpubl. Ph.D. thesis, Univ. of Wales, 22
- 15) エヴェリット Everitt は、夫と妻の空間行動パターンの違いを近年研究しているが、行動パターンの違いの主原因と割り出す、その多様な役割の根本的な基盤を、彼は問わない (Everitt, J. C. (1976): 'Community and propinquity in a city', *Ann. Ass. Am. Geogr.* 66, 104-16)
- 16) Hayford, op. cit. 1
- 17) Hillman, M., Henderson, I. and Whalley, A. (1974) *Mobility and accessibility in the outer metropolitan area*, Report to the Department of the Environment (London); Tivers, J. (1977): 'Constraints on spatial activity patterns: women with young children', *Occ. Pap.* 6 Dep. Geogr., King's College, London
- 18) Gray, F. (1975): 'Non-explanation in urban geography', *Area* 7, 234.
- 19) Tivers, op. cit. 1-2
- 20) Hillman, M., Henderson, I. and Whalley, A. (1976) *Transport realities and planning policy* (London)
- 21) Martensson, S. (1977): 'Childhood interaction and temporal organization', *Econ. Geogr.* 53, 99-125
- 22) Lennrop, B. (1977): 'Social organization in its daily function', unpubl. pap. presented at a symposium on time-geography, IBG Annual Conference, Univ. of Newcastle upon Tyne
- 23) Peet, R. (1975): 'Inequality and poverty: a Marxist-geographic theory', *Ann. Ass. Am. Geogr.* 65, 571
- 24) Runciman, W. G. (1972) *Relative deprivation and social justice* (Harmondsworth) 30
- 25) Massey, D. (1975): 'Behavioural research', *Area* 7, 201-3

解題に代えて (吉田雄介)

私が今回訳出した論文 (特に、Burnett の論文) は、現在の洗練されたジェンダー理論やフェミニズム理論を援用した地理学的研究と較べたとき、隔世の感があることは否めない。そこには四半世紀の時の流れがある。時の流れの早さ、あるいはこの分野に限った時の加速は、ジェンダー・フェミニズム研究が数ある学問領域のなかでも最もホットな研究領域のひとつであったことを示しているとも言えよう。

すでに、地理学においてはこうした研究分野を専門に扱う雑誌 (*Gender, Place and Culture*) も発刊されているのみならず、地理学関係の雑誌には毎号たくさんのジェンダー・フェミニズム研究論文が掲載されるようになって久しい。また、かつてはジェンダーに集中するあまり人種や階級を分析から落としていると非難もされたが、最近では、ジェンダーと人種、階級、セクシュアリティ、国家などを相互に関連づけて論じる研究も増えてきた。

しかしながら、論文の蓄積、理論的な側面の発展、あるいは行動や運動の発展 (欧州における女性議員数の増加など)、データの蓄積 (女性に関する統計データはひと頃に比べればずっと整備されている) は確かだとしても、現状を冷静に俯瞰した場合、当時主張されたことが今なおまったく解決に至っていないという歩みののろさに驚くのではないか。つまり、女性の地位の向上であるとか、無意識に身体化されている男性中心主義の改善、あるいは女性の理想化等こうした側面の変化は少ない。例えば、Zelinsky et al (1982) の論文には、地理学という分野において女子学生や女性教官の数が絶対的・相対的に少ない理由を回路図、(p. 323) として示しているが、この回路に変化があったという確かな証拠は見当たらないだろう。

ジェンダー・フェミニズム地理学の展開に関しては、リンダ・マクドウェル (1998) や吉田容子氏 (1996) が適切に整理しているものの、焦点は 1980 年代以降の発展期にあてられ、残念ながら 1970 年代の研究に関してはあまり触れるところがない。確かにこの時期の論文は洗練されているとはいえない。それは致し方がないにしても、単に古いとか洗練度に欠けるといった理由で低い評価を下すのは早計に過ぎるだろう。1970 年代の研究は現在の研究主題とも深く結びついて

いるのである。今回は、初期の論文 2 本を訳出したこともあり、この 2 論文を中心に据えて、1970 年代から 80 年代初頭までの重要な関連論文を整理してみたいと思う。

なお、時期的な背景を確認しておけば、1970 年代後期からは、地理学関係の各雑誌で女性に関する研究特集が組まれるようになる。たとえば、1978 年の *Journal of Geography* (Vol.77, No.5) では「Women in Geographic Curricula」という特集が組まれて、9 本もの論文が掲載されている。また、1982 年の *The Professional Geographer* (Vol.34, No.1) では、Monk & Hanson の巻頭論文に加え、5 本の女性に関する研究論文が掲載され、ここでは米国、インド、オーストラリアとさまざまな地域が扱われている。

さらに、80 年代に入るとこの分野の研究は進展を示し、すでに、1982 年には当時この分野において精力的に研究を進めていた三人の女性地理学者 (Zelinsky, Monk, and Hanson, 1982) による、地理学の分野における女性の地理学 (geography of women) についての諸研究を紹介したかなりの枚数のレビュー論文が書かれている。また、英国地理学者協会 (Institute of British Geographers) において、Women and Geography というワーキング・グループの活動を経由して、Women and Geography Study Group がめでたく発足したのもこの 1982 年のことである。なお、このグループは、①ジェンダー差異の地理学的意味についての研究およびフェミニストの視点からの地理学的研究の促進、②こうした研究の情報交換の促進、という 2 つの目的を持っていた (Area, 1982, 14-2, p.150)。

では以下では、訳出した Burnett(1973)と Tivers(1978)に加えて、Hayford(1974)と Monk and Hanson(1982)、Bowlby and Mackenzie(1982)というそれ以外の主要な 3 本の論文を加えた計 5 本の論文の主張とその意義を振り返ることで、1970 年代におけるジェンダー・フェミニズム研究を回顧してみよう。

<Burnett(1973)論文>

今回かなり古い論文を 2 本訳出したが、敢えてそのような作業を試みた理由は幾つかある。ひとつには、もちろん地理学におけるジェンダーの扱いを系譜学的に遡るためである。単に女性を扱った論文は、ジェンダー地理学とは言えない (もちろん、そうした論文が

書かれた背景を探るならば、ジェンダー地理学の研究対象とはなるが)。男女という性差が、社会的・文化的に構築されたものであり (ジェンダー)、その非対称性が明らかになるならば、自ずと女性の地位向上への運動 (フェミニズム) に向かわざるを得ない。もちろん、ひとつの流れとして括ってしまうことはマスキュリンな学知のテクノロジーかもしれないが、逆に遡行することによってその起源の多様さが明らかになるかもしれないし、実際に多様である。

そうした文脈で考えるならば、Burnett が女性の地理学を主題としたというよりは、むしろ当時のマスキュリンな学知に対抗する別な理論を提案するために、女性の役割に訴えたことが理解されるだろう。Burnett のそれは、単に女性を扱った地理学的研究ではないし、ジェンダー地理学と呼ぶには違和が残る。むしろ、その存在自体がヘゲモニックな学知に深く切り込むことと表裏一体であるフェミニズム地理学、その嚆矢とみるべきではないのか。なお、彼女のフェミニズムの影響は、共に 1970 年に出版されて当時評判になったケイト・ミレットの『性の政治学』とシュラミス・ファイアーストーンの『性の弁証法』から大きく受けているようである。

さて、計量革命とフェミニズムのあいだにはひとつの溝がある。女性という問題を軸にした場合、計量分析には、いくつもの問題が現れてくる。たとえば、①女性についてのデータは存在しないか、あるいは存在するにしてもほんのわずかしかない。そしてそれ以上に問題なのは、②そうした資料やデータは男性の尺度から測定されたものであることである。Burnett の場合は、「女性」=「母親」=「専業主婦」=「世帯 (核家族) の消費者」という定義を分析上一致させる傾向があることを問題視している。③また、計量分析が客観性という名のもとに多くのものを排除した上に成立している点は、マスキュリンな学知の典型といえよう。

女性を軸にして Burnett が問題としたのは、まず従来の都市地理学の不備を明確にしたことであり、ついで、家族のなかで男女の役割が自然化・内面化されてゆく点を重視し、「心理学」という側面から女性の抑圧の理由を説明したことである。しかしながら、Burnett 自身は、①ジェンダーないしフェミニズムという用語を直接使うわけではない。②従来の計量地理学、立地論に対する批判を行うが、後の Massey のように洗練

されているわけではない。③また、「男性の権力の心理学」という精神分析的な考え方も導入するが、後のフロイト＝ラカンの精神分析を応用したフェミニズム地理学に較べれば洗練されていない。そうした洗練さの欠如が、後の論文においてさほど言及されてこなかった理由なのかもしれない。しかしながら、訴えかける状況は 30 年前のこの当時と現在にさほどの変化はないのではないか？（前号で訳出したタウンセンドの主張と比較されたい）。その意味で 30 年前の古い論文、と捨て去るには重すぎるのだ。洗練されていないという言葉で、看過するのは不注意に過ぎる。

<Hayford(1974)論文>

70 年代初頭には、ジェンダーやフェミニズム理論というよりは、まだマルクス主義地理学の伝統に深く根差している。この当時の女性を扱った地理学的研究としては、Burnett(1973)論文が発表された翌年に同じ *Antipode* 誌に掲載された Hayford (1974) の論文がある。両者の共通点は、女性抑圧の根源を歴史的に探っていることであり、こうした分析の出発点としてマルクス主義的な見方は適していたようである。この時期のこうした研究は、ある意味では抵抗の文脈にあったのだから、マルクス主義地理学の果たした意味はその点で小さくはなからう。もちろん、Burnett にしても Hayford にしてもその出発点としてマルクス主義理論を重視しているのであって、マルクス主義的な見方が女性あるいは女性の状況を扱うには不十分なことを認識し、それを発展させるための努力を行っているというのが正確なところであろう（フェミニスト地理学とマルクス地理学のアンビバレントな関係については Rose(1993)を参照のこと）。

なお Rose(1993)は、「生産と再生産のあいだの関係がいかに異なった種類の空間を生成するのかについての最初の詳細なフェミニストの議論は Hayford の 1974 年の論文である」(p.118) と評価しているが、Hayford の場合も、先の Burnett 同様、ジェンダーという単語は直接に用いていない (sexual division of labor や sex roles といった単語は頻出するが)。そして、彼女は、「ここ (here)」と「あっち (there)」という空間的弁証法を重視する。つまり、前者は人間に安心を、後者はストレスを与える機能がある。これゆえ、人に安心を与える世帯が農業生産の開始以降に重要性を増し、さらに

女性が世帯の核であることが、生産システムの安定にとって必要であった。しかしながら、政治、経済活動の大規模化にともなって、女性はその中心性を失ってしまい、資本主義下では、女性と世帯に残された機能は、労働力の再生産、労働力の世話、ローカリティの確保（安全な空間としての家の維持）に過ぎなくなった。このように、世帯は経済システムの中心から周縁へとその役割をシフトした。そして、この安全という機能は資本主義が置き換えられなかった唯一の世帯の機能であるとしている。

付け加えるなら、Burnett および Hayford の論文が掲載されたのは *Antipode* 誌であるが、この雑誌の果たした役割は極めて大きい。そして、この両論文が掲載された雑誌のマージナリティーは大いに注目に値する。しかしすぐに、つまり 1970 年代後半には、一般的な地理学雑誌にもジェンダー・フェミニズム関係の論文は現れ始める。そしてその洗練化も早く、Tivers(1978)論文などはその良い証拠だろう。

<Tivers(1978)論文>

彼女は、「社会学は男性志向であるがゆえに性差別的なのだ」というオークレーの主張を引用して、それは地理学にも当てはまると主張している。しかしながら、社会学の分野では女性研究の科目を開講するなどの変化が見られるのに対して、地理学ではこうした変化はみられないと冷静に分析している。

さて、地理学では消費行動その他の分野で女性を研究対象としてきたのであるが、この場合、世帯が地理学者の分析にとっての基本単位であった。そして、「世帯の代理」として女性を用いている点を批判して、世帯としてではなく女性の点から検討する必要性を訴えている。そして、地理学者は既存の社会構造を支え、女性の役割とその行動パターンの真の理解を妨げてきたと主張する。

こうした、分析上の基本単位としての「世帯」の重視と、「女性（より正確には専業主婦）」と「世帯（より正確には核家族）」の同一視は 90 年代の論文においても問題点として繰返し主張されることであるし、また中立的として考えられがちな学問の分析が実は現状維持（ないし変化）に関与しているという学知のイデオロギー性が暴露されたのは何も最近のことではないのである。それゆえ、こうした問題を誰もが目撃す

るようになったことには、その前史があるのであり、その重要性を正当に評価すべきであるし、またこれらの問題が1980年代や1990年代に解決されたとは決して言えないのである。

なお、今回訳出したBurnettとTiverの最大の違いは、Bowly & Mackenzie (1982)が指摘するように、両者の前提の差にあるといえよう。つまり後者は、女性というカテゴリーを生物学的に決定されたカテゴリーではなく、社会関係によって定義された女性と捉えているのに対して、前者はすべてのジェンダー差異を社会的構築物として捉えているのではなく、男女の生物学的な差異(体力や攻撃性)も重視している。

<Monk and Hanson(1982)論文>

この二人は、論文の冒頭で、地理学はフェミニズムの影響のない分野であると断じている。そして、この解決のために、人文地理学のあらゆる流れのなかにフェミニスト・パースペクティヴを導入する道を求めて、地理学的調査の内容(content)、方法(method)、目的(purpose)におけるセクシスト・バイアスの考察を進める。そして、「より完全な人文地理学に向けて」と題した結論部で、「女性の問題(women's issues)についてのより慎重な扱いは、フェミニストではないにせよ、非性差別主義(non-sexist)な人文地理学を発展する上での基本である」(p. 19)と主張している。

<Bowly and Mackenzie(1982)論文>

この二人は、「フェミニスト批評は、人間-環境関係のなかでのジェンダー役割の差異から、その役割を分析することを地理学者に要求する」と主張し、実際には地理学はその要請に応じきれていないと主張している。その上で、英国における地理学者の研究に対するフェミニズムの影響を短評している。

この論文で扱われる主要な研究は、今回訳出した二本である。そして、Burnett(1973)の論文は、現在の社会・政治構造が家父長制的であり、家父長制的ジェンダーほどには階級を重視せず、戦略として分離主義を重視する傾向を持ったラディカル・フェミニズムの立場にあると分析している。一方Tivers(1978)の論文に対しては、女性の従属の理由を家父長制よりも、階級と生産関係の点から説明する社会主義フェミニズムの立場にあると見なしている。

なお、地理学的な視点を変えるには、こうしたフェミニスト諸分析(ラディカルおよび社会主義フェミニズム)の統合が必要であると主張している。そして、彼女の論文で扱い切れなかった問題点としては、①各国の異なり、②理論、経験主義的調査、政治的実践の関係、の二点を挙げている。しかしながら、この二点に関しては、それ以降研究が大いに進んだ分野といえるだろう。

以上、ここで訳出した2本の論文に加えて、それ以外の主要な3本の論文も同時に検討したわけであるが、どの論文も地理学の分析における女性のステレオタイプ化を批判し、女性についての研究は、それまで所与とされてきた(自然なものと同様に自明視されてきた)地理学のさまざまな方法や概念を脱自然化させ、それがポリティクスのあることを暴露した。もちろん、家族や資本主義、あるいは近代といった概念の捉え方が幾分ステレオタイプのなきらいもないわけではないし、実例として引用される例も不十分なものが多い。もちろん、こうした欠点は新しい分野の開拓期には不可避なものであり、それゆえ上で論評した5本の論文はどれも大きな意義を持っていると評価できよう。

いまやジェンダーやセクシュアリティに一言でも触れないような論文はナンセンスないしは罪であるかのような状況となっている(戦略として分離主義 gender separationの立場に立つフェミニストからすれば、男である私がこうした論文を訳し、解題を書いていること自体が問題だろう)。こうした考え方が広く受容されるようになったのは、地理学内部ではひとえにBurnettやHayfordといった先達や、*Antipode*誌などのおかげであろう。実際に、フェミニズム地理学の教科書では、TiversやMonkといったこの分野を初期から担ってきた先達たちの自らの回顧が載せられるようになっている(例えば、Women and Geography Study Group, 1997)。しかし、ジェンダーという用語を駆使することがファッションとなってしまった現在、Burnettらがそうした論文を書かざるを得なかった状況や苛立ちを理解することは難しい。私たちはもう一度、反省の念を込めて1970年代における先駆者たちの視点から初期の論文を振り返ってみることが必要なのかもしれない。

参考文献

- Burnett,P.(1973): Social change, the status of women and models of city form and development. *Antipode*, 5-3, 57-61.
- Hayford,A.M.(1974): The geography of women: An historical introduction. *Antipode*, 6-2, 1-19.
- Tivers,J.(1978): How the other half lives: the geographical study of women. *Area*, 10-4, 302-306.
- Bowlby,S.R. and Mackenzie,S.(1982): Feminism and geography. *Area*, 14-1, 19-25.
- Hanson,S. and Monk,J.(1982): On not excluding half of the women in human geography. *Professional Geographer*, 34-1, 11-23.
- Zelinsky,W., Monk,J. and Hanson,S.(1982): Women and geography: a review and prospectus. *Progress in Human Geography*, 6-3, 317-66.
- Rose,G(1993): *Feminism and geography: limits of geographical knowledge*. London, Polity Press.
- Women and Geography Study Group(1997): *Feminist geographies*. Longman.
- マクドウェル・リンダ (1998) : 空間・場所・ジェンダー関係 : 第1部. 空間・社会・地理思想, 3, 28-46 (McDowell, L.(1993):Space, place and gender relations: Part 1. *Progress in Human Geography*, 17-2, 157-179.) .
- 吉田容子 (1996) : 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. 地理学評論, 69A-4, 242-262.